

新羅金銅仏年代考

——特に如来、菩薩小像の台座形式を中心として——

松 原 三 郎

一

新羅の仏教彫刻史上、特に石像の重要な点に就ては別稿で論考したとおりだが、^{註1}一方、数量の多い銅像の無視出来ないこともいうまでもない。ただ、それら銅像がごく僅かの例外を除いてすべて三十数センチまでの小像であることは彫刻史の資料としてのまず第一の難点であり、加えて在銘像の皆無なのも年代の決め難い理由だといえよう。当然、対する石仏との比較が問題となるが、一面、これら小銅像は一時に多量に製作された結果かあまりにも類型化が著しく、むしろ石像とは別箇に銅像独自の様式や形式の変遷を考慮すべき場合が多いようである。更にその年代決定に当って様式や形式の源流として中国の造像との関連も重要だが、古新羅造像における古く北魏末乃至東魏、下って隋造像との密接な関係は例外として、遺品の大部分をなす新羅統一期の造像では時代の下るにつれ中国の影響を求め難く、そのことはまた新羅仏の強い保守化につながり、外来様式の刺激を受けないために却って作品の芸術性を墮落

させる結果となったのである。

これら諸点によって従来、新羅の小金銅仏に就ては古新羅造像中の特殊な資料（特に半跏思惟像）以外、統一期に下る金銅像の様式や形式の変遷はそれほど系統的に考究されなかったのが実情だが、本稿では古く古新羅代に始まり、特に新羅統一期の如来及び菩薩の小金銅像の年代考を試みたく、その製作年代を示す一つの基準としては特に台座形式をとりあげたい。即ち、これら新羅金銅像造像においては台座形式が重要な要素であり、たとえ著しく類型化した小像でも台座形式に製作年代の特色が一応、示されていると見られるからである（勿論、必ずしもそれぞれの形式が年代順ではなく、製作時代が前後するものいうまでもない）。ただ比較的大作の場合、特に時代の下ったものでは本体と台座の別鑄のために屢々台座の欠失しているのは遺憾だが、現存する遺品の限りでは新羅の金銅如来及び菩薩像の台座形式はこれから述べるおよそ五つの形式に分けられるであろう。以下、これら台座形式を中心に新羅の小金銅仏（慶州仏国寺、栢栗寺の大銅仏を除く）、特に如来、菩薩像に就ての概要を述べよ

う。

二

新羅の古都

慶州及びその

近郊に所在

し、或いはそ

挿図1 石造仏倚像
韓国国立博物館慶州分館蔵

の地方で出土した石像には概して古様のものが多いが、そのうち七世紀半ば近い製作として古新羅の特色を最もよく發揮しているのは長倉谷で発見された如来倚像(挿図1)と二菩薩像である。特に前者はまるまるとした大きな顔、ずんぐりとした体躯の所謂童子童顔型の造像で、倚像形式という点からも隋様の系譜にあることは明らかだが、このような倭小な体躯に古新羅の典型的な特色を示す金銅像としてはここにあげた如来立像(図版VI A)もその一例である。(法量は図版要項に記す。以下本稿掲載の金銅像の法量は本稿末尾及び図版要項を参照のこと)。長倉谷の石像(挿図1)との類似はこの金銅像が古新羅末期の製作である立証となるが、特に注目すべきはその丈低い大きな蓮座である。まさに頭部の大きく両脚の短かく下半身のつまった体躯に呼応するもので、厚ぼったく、ややラフな蓮弁のつくりも古新羅造像の特色といえよう。

次に、挿図3の観音菩薩立像(韓国国立博物館蔵)も早く関野貞博士に

註3

よりその古様が指摘されているが、出土地は不明にせよ古新羅代造像として間違いない。まず、両あごの張った顔容や両肩の張り出した直方体の体躯のつくりも古新羅代の特性だが、同じ菩薩像として石像との比較

註4

では慶尚北道軍威石窟三尊石仏の脇侍菩薩像に近く、それよりやや遡るであろう。即ち、軍威像の隋後半期様式に対してむしろ隋前半期様式に則し、天衣のおおまかなつくりや瓔珞の簡素な点も古様だが、特に背面のスカート状の下裳や両肩にかかる天衣の平行線のひだも北周造像に見られるものに通じ、光背も隋風の頭光であったことは、後頭部に残ることでも明らかである。そして、最も注目すべき台座は蓮座と八角座で成るが、蓮弁はやや厚ぼったく突端のはねかえりもそれほど鋭くない。

いまこのような単弁の蓮座を百済の七世紀代末期の造像に求めると、まず挿図4の金銅仏立像(韓国博物館蔵)があげられるが、この百済金銅像の蓮弁は同じ単弁ながらむしろ薄づくりで、しかも一面、台座全体はふっくらとしたおだやかなまる味を見せている。一般に古新羅系の金銅仏の蓮座は百済の蓮座に比べて丈低くやや鈍重な感じを免れないようだが、その点、両者はかなり対照的で、或意味では像全体の作風を示しているといえよう。

挿図2 金銅仏立像(図版VI B)背面

ところで、現在のところ出土地の明白な古新羅代の金銅仏は極めて求め難いが、その点、一九五二年十二月に慶尙北道榮州郡順興面の宿水寺址で出土した二十数体の銅仏中に古新羅末と推定されるものが数体含まれているのは貴重である。^{註5} 挿図5の薬師如来像もその一体だが、台座は

挿図5 金銅薬師仏立像
宿水寺址出土

挿図4 金銅仏立像・百濟
韓国国立博物館蔵

挿図3 金銅観音菩薩立像
韓国国立博物館蔵

やはり韓国国博蔵の観音像（挿図3）の台座と同系と見られる。しかし乍ら、それ以上にこの蓮座とよく似ているのはここにあげる同じ薬師如来立像（図版VI A）の台座である。全体にややふっくらとして、共に基壇は円座だが、同じ単弁ながら図版VI Bの金銅仏のそれほど厚くなく、特に主弁の間に小さく尖った単弁をのぞかせているのは挿図5も図版VI Aも両像同じである。そして、この両像のような偏袒右肩、左手拳手印、下げた右手に薬壺をのせた金銅薬師如来立像は古新羅代薬師像に見る定型だが、すべて角張った体軀と大きな頭に古新羅の特色を示し、台座もまた同様に古様である。

なお、同じく宿水寺址出土の銅像中、やはり比較的古様を示す菩薩像の台座にも韓国国博蔵の観音像（挿図3）の台座に近いものを求められるが、その古新羅代に遡り得ることは後頭部に光背（頭光）をつけたほぞを残している点でも推考されよう。そして、韓国国博蔵の観音菩薩像を始め、特に古新羅代の定型化した金銅薬師立像では挿図5の宿水寺址出土の一体や図版VI Aの一体に見るように通例、後頭部にはほぞを残しているが、とりわけ、図版VI Aの小像ではその大きなほぞが目立ち（挿図31）、恐らく長倉谷石仏（挿図1）のような円光をつけていたと考えられ、この像の古様（隋様）を示す立証となるであろう。

ここで注目すべきは同じく古新羅末に属す図版VI Bの金銅像が背面（挿図2）に棒状のものを立ててその光背をとりつけたと推測されることで、台座表面にはそのための穴を残しているが、このような残穴は古新羅末から統一時代初期の金銅像台座に屢々見られるようである。即ち、光背とりつけの形式における半島独自の手法というより、むしろ中国の

型台座の金銅如来像、菩薩像の製作年代は長倉谷石像や軍威石窟三尊石仏との比較からも一応、七世紀半ば頃を中心とその後半に暫時続いたと考えられるが、遺品の極めて少ないのはいうまでもない。

三

これまで述べたA型台座の特色は通じて高さの低いことだが、その原因は蓮弁の扁平な点と共に蓮肉部、即ち請座の低い故でもある。ところが、この低い蓮肉部が次第に発達し、更に仰蓮弁の生じて、仰伏の二座



挿図6 金銅仏立像

挿図7 金銅仏立像

一地方、或いはその江南あたりで行なわれた形式が三国末統一初期に半島に移入されたとも予想されるが、台座形式と併せて興味深い問題である。しかも、そのような光背とりつけの形式と後頭部ほぞによる頭光形式とは前者がやや後れて行なわれた可能性が濃く、図版VI BとVI Aの金銅仏でも前者が後者よりやや時代が下ることは肉髻が後者のような低いまんじゅう型に対して高く盛り上って造られていることでも理解される。

いずれにしろ、ここにあげた四像(宿水寺址出土の一体をふくめて)はすべて古新羅末期の造像と見てよいが、台座形式もまた新羅における最も古様といえよう。いまこの台座形式をA型と名付ければ、このようなA

挿図9 金銅仏立像(図版VII B)背面

挿図8 金銅仏立像(図版VII A)背面

に分れる通例の蓮座となつたのがこれからあがるB型で、まずA型からB型への過渡的な形を示すのが図版VICの金銅像に見られるものである。即ち、前述韓国国博蔵の金銅仏(挿図3)に見られた八角形の二重基壇は一層明確になったが、何よりも大きな変化は蓮肉部も高く、蓮弁もA型に比してふつくと丈高くなつたことである。なお、この場合、単弁ではなく複弁式のものも生まれ、例えば宿水寺址出土の金銅仏立像中にもその一例があるが、やはり大きく厚ぼったい蓮弁である。

ところで、ここで興味深いのはこのように発達した蓮肉部の周辺に蓮弁を線刻した金銅仏(挿図6)の知られることで、この線刻の蓮弁が高肉彫となることも根津美術館蔵の金銅仏立像(図版VID)との比較で一そう明らかである。そして、根津像では基壇が三重である点も注目すべきであろう。

これを要するに、この種B型台座の成立は結果的には新羅金銅仏の台座を高くしたわけだが、それはまた仏像自体の様式発展と呼応することは勿論である。即ち、前述のようにA型の造像では頭部が過大でずんぐりした体軀、更に衣文のつくりも粗く大まかな点、低くラフなつくりの台座が適応したが、このB型台座の本体はA型台座金銅仏とくらべると頭部も

挿図10 如来立像台座
慶州皇福寺三層石塔内出土

比較的小さく、長身の姿に衣文のつくりも細かい。図版VIBの金銅仏より根津美術館蔵の金銅仏(図版VID)への進展は台座と本体との関連した様式変化を示す一例といえよう。なお図版VII Bの金銅仏では仰蓮座の蓮弁主葉の間に小葉を現わし重列となっているが、この台座では更に伏蓮弁内に複弁式の深い切り込みが見られ、一そう台座構成が複雑化している。それだけにまた、このような台座を具備したこの金銅仏(図版VII B)は図版VICのようなお簡素な台座の金銅仏よりは時代が若干下ると考えてよい。

一般にこのB型台座の金銅如来像では衣文が胸部を中心に楕円形に垂下している点や、後述する新羅統一時代後半期の金銅仏にくらべるとなお頭部が体軀に比してかなり大きいことが特色の一つだが、その点はA型台座の造像に通ずる古様の残存といえよう。そして図版VICの如来像の顔にはなおふつくとしたまる味もあり童顔とよぶべきものに近いが、一面、根津美術館像(図版VID)のように四角な顔と両肩の張った直方体の体軀の積み重ねというブロック的な構成も目立つ。勿論、首には三道が表わされ、体軀の肉付きも豊かになっており、特に背面には型持の穴が既に見られるのは(挿図6の像にはない。根津美術館像では埋め込んだ跡が残る)A型台座金銅像とは異なる点である。要するに新旧両像の並存した過渡期の造像として、中国の造像様式で言えば唐代六二〇年頃より六六〇年頃の様式に比定されるが、同じB型台座の金銅像でもその製作時代にはかなりの年代差があり、図版VICや挿図6の金銅仏の新羅統一時代最初期に対し、根津美術館像(図版VID)では若干年代の下ることとはこの像が慶州南山の金光寺址より出土した新羅の石仏立像と一脈通

(図版ⅦAとⅦB)もその例だが、共に七世紀末の製作と推定される。

四

私は新羅金銅仏でも古く古新羅代より新羅統一時代初期、即ち、七世紀の半ば頃から末期の如来像、菩薩像の台座形式として二つの型式をあげたが、前者のA型がB型より概して早く行なわれたことはいうまでもなく、古新羅より新羅統一期への台座移行はこのA型からB型への系譜



挿図12 石造菩薩立像 慶州南山里溪寺址

挿図11 金銅菩薩立像 韓国国立博物館蔵

ずることでも理解され、それと同時代の六七〇～八〇年代の製作と見てよからう。

なお、朝鮮の金銅像では光背を完備した遺品は極めて稀である。その理由はまず第一に、中国の金銅像のように光背が像身と一鑄というのは挿図7のように僅か五～八センチぐらいの小像（この像の台座はB型の変型であろう）に限られていたことや、更に光背が本体と別鑄の場合も透彫りの極めて薄づくり（挿図8、9参照）であることによるのであろう。新羅統一期に下る如来像では一応、全身光と見られ、ここにあげる二体



挿図13 金銅仏立像 韓国国立博物館蔵

内で理解してよいと思う。

しかし乍ら勿論、これらA型とB型が同時に行なわれた時代もまた予想され、必ずしも両者が順序よく移行したわけではない。更に



挿図14 隋金銅観音像台座

注目すべきはこのようなA型―B型の系譜に正確には加えられない台座も見られることで、特に新羅統一期の初期には金銅仏台座の形式がかなり多様性を増したようである。以下その点について考えてみよう。

まず、挿図10は慶州皇福寺三層石塔内出土の黄金造如来像の台座で、銅像台座と同一に談ずるのは多少問題だが、いずれにしろ、この台座は一応、A型の基準とすべき韓国国博蔵の金銅観音像(挿図3)の単弁式より複弁式への変化と見られる点、いわばA型の一種の変型とも解されよう。しかも一面、A型同様全体に扁平ながら、蓮弁の彫法のはるかに力強いのは完全にA型と同一範疇に加えるにはやや難があると言わねばならず、それだけに製作時代も七世紀の何時頃と正確に決めにくいわけがある。

ここで同じく伏蓮座のみ、複弁式という金銅像台座の一例(挿図11)をこの皇福寺像台座と比較すると、まず基壇が前者の八角座に対して後者は円形なのを始め、全体におだやかな丸味の感じられるのは大きな相違である。両者ほぼ同形式で蓮肉部も低く、それほど丈高くない作りながら、この金銅観音像台座(挿図11)が皇福寺像台座と系統を異にするのはまず明白であろう。特に注目すべきはこの台座が慶州南山里溪寺址の石造三尊仏脇侍菩薩像の台座(挿図12)と一脈通ずることで、しかも、像自体も体躯のつくりや容貌を始め、下裳の上下に流れるひだの手法もよく似ている。この金銅像も背中に残るほぞにより里溪寺址菩薩像と同じ大きな頭光をつけていたことが理解されるが、いま中国の様式で律すると唐代六五〇〜七〇年代の造像様式に比定され、製作年代は里溪寺址の石像とくらべていくらか早い七世紀後半と推定される。そしてこの金銅

像台座が図版VII Bの金銅像台座の伏蓮座に近い点、或いはB型の変型とも言えるが、正確にはそれと一線を劃し全く別の型式を設定すべきであろう。いずれにしろ、これら皇福寺黄金像台座(挿図10)や挿図11の金銅像台座は新羅統一時代初期の台座形式の多様性を示す好例だが、更に挿図13の一例もまた新羅金銅仏台座として異色の形式である。

そもそも、新羅金銅仏は仏像の様式も新羅化の傾向が強く、概して隋唐様式との関連を認め難いが、このような台座形式には一そう中国の影響を汲みとりにくいようである。即ち、まず古く古新羅代、前述A型台座の蓮弁のような大型で厚い単弁は一応、隋石仏に求められないこと^{註8}もないが、しかもその先端の尖った厳しい感じは新羅単弁のいかにも大まかでのんびりした感じとは対照的だといえよう。これが新羅統一期の金銅仏の台座では一そう中国、唐との関連の少なく、新羅独自のものとなったわけである。

ところで、挿図13の金銅仏立像(韓国国立博物館蔵)は新羅金銅仏としてそれほど大作ではないが、塗金の美しく仕上りのよい点、特に均斉のとれた体躯と力強い衣文のつくりは新羅金銅仏の秀作の一つに数えられる。慶尚南道陝川という出土地の知られることも貴重だが、ここで注目すべきはその台座形式である。まず、この形式を新羅造像の伝統として考えると一応、前述根津美術館像の代表するB型の発展したもの^{と見做してよ}かろう。更に、複弁式という点では前二像(挿図10と11)との関連も予想されるが、しかもなお、この金銅仏台座にはそのような新羅の系譜とはまた別の影響を感じさせるのである。私はこの台座に中国仏の台座との関連を考えたと思う。

ここにあげる金銅像台座(挿図14)は隋末期の製作で、その本体(拙著「増訂中国仏教彫刻史研究」図版21C)に見る瓔珞や天衣のつくりに応じ、かなり豪華さを増しているが、いま、挿図13の新羅金銅仏台座をこの隋末金銅仏台座と比較すると、基壇や蓮弁のつくりなどその形式のかなり近いことは明らかである。ただ、新羅金銅仏台座(挿図13)では下段の基壇と伏蓮座が仰蓮座に比して大きく、更に興味深いのは仰蓮座と伏蓮座の中間に六面に区切られた角柱が見られることである。このような六面角柱の造られた中国の早い作例としては唐永徽元年(六五〇)銘三尊仏碑像内の本尊台座が知られ、^{註9}その点ではこの新羅仏台座形式の源流が隋代より下って初唐代にあることを示している。仏像の様式自体もまた

挿図16 金銅観音像
(図版VII D) 背面

挿図15 金銅観音菩薩立像
伝公州出土

初唐様に則していることは両肩の張った堂々たる体躯や両ももの隆起したふっくらとした肉付き、更に柔軟な衣文のつくりでもよく理解され、例えば前述根津美術館蔵(図版VI D)よりも様式の進展していることは明瞭で、製作時代も七世紀末に比定される。しかし乍ら、最も重要な点はこの新羅金銅仏(挿図13)の台座が単に形式上、初唐からの系譜の辿り得るのみならず、この彫りの鋭い、力強い作風こそまさに初唐様の直接の影響と見るべきことで、この金銅仏台座は唐、新羅間の関連を示す貴重な作例である。それにしても、新羅金銅仏としては、これ以前もこれほど明白なような作例の全く知られず、その点、百済金銅菩薩像と隋

挿図18 金銅仏立像
韓国国立博物館蔵

挿図17 銅造三尊仏立像

金銅菩薩像との密接な関連(台座形式もふくめて)、即ち、百済における外来形式受容の積極的な姿勢とくらべて新羅仏の保守性はかなり対象的といえよう。そして、これを過ぎれば、ますます新羅独自の台座が発達することも銘記すべきである。ただ、この像より若干下の皇福寺三層石塔出土の黄金造阿弥陀仏坐像^{註10}(前述仏立像とは別の一体)の台座に盛唐初期造像台座との若干の関連のえられるのは興味深く、即ち、この黄金像は七世紀末八世紀初頭の製作と見てよからう。

以上、皇福寺石塔出土の黄金像の台座(挿図10)や挿図11の金銅観音像の台座、更に挿図13の金銅仏立像の台座などはA型乃至はB型の変型と見られないこともないが、しかも、完全にそれら型式の範疇に加えられないのは要するに新羅金銅仏も初唐造像の影響下、その形式の一そう進展した結果である。(なお、挿図7のような小像には変型が多い)

五

さて、新羅の金銅仏の台座で最も普遍的で、且つ基準となる形式は次のC型台座である。即ち、仰伏蓮華座とこうざま透彫のかまち座、及び基壇の三部から成るが、ただ同じC型とよぶべきものでも多少の差異が

挿図19 金銅菩薩立像

見られるのはA型やB型と同様である。まず、仰蓮座と伏蓮座とが直接つながるものとその中間に円柱の見られるもの、基壇の六角乃至八角、八稜形の違い、更に伏蓮弁の単弁式と複弁式になった場合などであるが、なかでも図版ⅧCの金銅仏台座のように請座に仰蓮弁を造らないのは珍しい。そしてこの種C型台座で最も典型的な優作としては韓国国立博物館蔵の金銅仏立像(挿図18)の台座をあげることが出来る。ふつくとした仰蓮弁と彫りの深く力強いづくりの伏蓮弁や、全体にいかにもがつしりとした感じは本体の堂々たる姿によく調和し、台座が仏像全体の年代を示す基準となることをよく示している。

なお、本稿ではこのようなC型に類す台座を有し、且つその基壇の両脇に小さく比丘像を配す極めて珍らしい如来立像の一例(挿図17)をあげたい。両比丘像の台座と一鑄で造られている点、まぎれもなく三尊形式を意図していることは明白だが、このように基壇を拡大し、その上に比丘を侍立させるという形式はむしろ中国的だともいえるか。製作年代は八世紀後半と推定される。

ところで、問題はこの種C型とよぶべき台座がどのような系譜から生

挿図20 石造薬師仏坐像
韓国国立博物館慶州分館蔵

れたかであるが、ここで注目すべきはC型台座の第一の特色とすべき透彫り^{こゝろざま}の出現が極めて早いのではないかと推測されることである。即ち、ここにあげる伝公州出土の金銅観音像(挿図15)は最近、百済の造像と発表された一資料^{註11}だが、その台座は伏蓮座下の基壇を欠き、特に全体におだやかなつくりを特色とする点、新羅台座との大きな相違が見られる。しかも、透彫り^{こゝろざま}の存在することは否定出来ないであろう。未見のために詳細を知り得ず、製作年代に就ての私見もお保留せざるを得ないが、窺岩面出土の百済金銅観音像と比較してもその百済系であることは疑いなく思う。いずれにしろ、この金銅観音像(挿図15)の発見により、新羅統一期の金銅仏台座における透彫り^{こゝろざま}が或いは百済に始まるのではないかと推測され、更にまた中国の江南に遡ることさえ予想させるが、随ってC型台座の成立に就ても重要な問題を提示したわけである。

しかし乍ら、この種C型台座の成立を一応、新羅金銅仏の枠内で解釈する場合は当然まず第一に考えられるのはB型からの展開であろう。勿論、その場合もこのC型に属す台座を具えた金銅像がすべてB型台座の金銅像より時代の下るわけではなく、図版VII Dの観音像のように比較的時代の遡る造像の知られることも銘記すべきだが、それにしても新羅金銅仏の枠内ではC型の成立がB型からの系譜以外には予想できないことも明らかである。いまその点を或程度立証し得る一資料として図版VII Cの金銅観音像の台座をあげると、この台座は仰伏蓮華座と基壇の両部分により成る点はB型台座の範疇に加えてよいが、しかもB型台座と異なる大きな特色は中間の基壇が丈高く発達していることである。即ち、大

よその形はC型台座によく似ているにせよ、C型のような透彫りの^{こゝろざま}が現われていないのが大きな違いで、要するにいわばC型台座の前駆をなすとも見られよう。そして、台座のそのような古様に対応し、像自体の様式も瓔珞や天衣の左右相称など古く隋様の伝統を示し(背面は垂直)、製作時代は七世紀後半でも早い頃であろう。

以上、このような成立事情から推考しても、この種C型台座の流行もまたB型と同じく、否それ以上に年代の幅があったと考えられるが、比較的はその早い作例としては図版VII Dの金銅観音像があげられる。容貌、体躯のつくりになお中国との関連、特に唐初の様式の名残りを認められ、宝珠形の頭光をつけているのも古い形式をとどめているが、ただ背面(挿図16)下部のほぞにとりつけられた棒に光背(頭光)をつけるのは朝鮮独自の方式といふべきか。新羅統一期の金銅観音像の光背に就ては全身光の予想される場合もあるが、何よりも光背を具備したものを殆んど求め得ない点、なお今後の資料発見にまたねばならない点が多い。そして、光背形式もまた台座形式と同じくいわば中国とは異なる新羅化に問題があるが、その点、図版VIII Aの観音像では図版VII Dの観音像とくらべて造像様式上も一そう新羅化が甚しいといえよう。まず容貌を始め、腰部に見られる下裳のたくれや天衣の両端のはねかえりがその現われだが、しかも、上体裸身のこの菩薩像の祖系が隋末より初唐にあることは大きな三面宝冠をつける点からも推測される。これが挿図19の菩薩像となると一そう様式も進展し、むしろ盛唐様に比定されることは柔軟な腰のひねりや、卵形の顔容と高い宝髻でも理解出来、下裳の腰部における処理は前像と同じく新羅仏独自の手法となっている。铸造上も前像の置

型の穴以上に背面が大きく空洞なのは時代の下る立証となろう。そして、小像故に全体のつくりもやや粗略だが、台座もより豪華となるのに対し、むしろ簡略化の傾向の見られるのはこのC型台座が大量製作につれ、屢々様式の退化を来たした結果と見てよい。要するに、これら三像はこの種C型台座の金銅菩薩像の様式変遷を示し、台座も軽快、豪華、更に簡略化の違いがあるが、製作年代は図版ⅦDの菩薩像の七〇〇年前後に對して図版ⅧAは八世紀前半、挿図19の菩薩像ではその末期に下るであろう。

一方、如来像では図版ⅧBの金銅像が体軀のひきしまり、衣文の胸部を中心に放物線を描く点、それだけ初唐様に近く、台座の軽快なつくりも古様を思わせるが（像身背面の型持の穴も小さく一個のみである）、図版Ⅷ

挿図22 金銅仏立像 (図版ⅨA) 背面

挿図21 金銅仏立像 (図版ⅨA) 側面

代は図版ⅧBの金銅像の八世紀前半に對し、図版ⅧDでは八世紀後半、挿図18の金銅像はそれより下り、八世紀末に近いであろう。即ち、菩薩像と同じくC型台座のこの期間の盛行を示すが、勿論、このC型の始まりが早く七世紀代に遡り、一方、終末が九世紀代に下ることも予想されることはいうまでもなく、石像では挿図20の茸長寺址の薬師如来坐像の台座がこの型に当るわけである。いずれにしろ、新羅統一期の金銅仏の質量ともにすぐれた、いわば絶頂期はC型盛行の七五〇〜七〇年代と見てよからう。

挿図23 金銅仏立像 (図版ⅨA) 台座

Dの金銅像では衣文が隆起した両もみに沿って楕円を描き、ふつくらとした体軀は完全に盛唐様に比定される。そして挿図18の金銅像に至ってこのC型如来像の頂点とも言えることは堂々たる体軀と豪快な台座のつくりで明らかだが、これら如来像三体の製作年

六

以上、これまで述べたA型よりC型までの金銅像台座は古く古新羅代より新羅統一時代の前半期の流行とすべきことは特にC型台座でも時代の下の前述挿図18の金銅像の製作が八世紀末に近いと推定されることでもまず当然であろう。そして、この間、造像様式に就てもA型台座金銅像における隋様との関連を始め、B・C型台座金銅像の隋・初唐様、更にC型台座金銅像でもその末期における盛唐様の影響は注目すべきで、これらA―C型造像様式の新羅化の一面、なお中国との関連の全く否定出来ないことを物語っている。特に図版ⅧDや挿図18の金銅如来像では衣文が隆起した両ももに沿ってY字形に楕円を描く点、C型台座金銅像最後の唐様との関連はこのような盛唐後期様との関連をもって終りを告げたのである。そして、これ以後、新羅仏は中国からの影響の少なく、新羅独自の発展をとげるが、この大きな転換期は中国との年代差を若干考慮して七八〇年前後と見てよからう。即ち、これ以後を新羅統一期の後半期とよべるが、ここで注目すべきは三国史記でいう新羅の中代と下代の分岐点がほぼこの転換期に当るわけで、「(三国史記卷十二 参照)彫刻史の時代様式区分がそのような政治上の時代区分とほぼ近いのは興味深いことである。

なお、そのように新羅仏において唐造像の影響の弱まった理由は八世紀半ば以降における唐国力の低下に関連して新羅の唐との交流の次第に遠ざかったことによるのはいうまでもないが、ただ、その場合も唐造像との関連の全く見られなかったわけではないのは後述のとおりである。

しかし乍ら勿論、七・八世紀造像に見るような中国との密接な関連は認められず、逆に新羅独自の特色は極めて濃厚だが、その最も典型的な作例としてここでは図版IXAの金銅仏立像をあげよう。

一見して容貌、体躯のつくりの新羅風で、唐造像との関連の少ないのはそのままこの像の製作年代を示し、新羅の九世紀代に入る造像と見てよからう。且つ、そのような年代として、最も新羅的な特色を示すのはその台座形式で、これまで述べたC型台座に一応加えられるが、しかもそれを更に進展させたものであることも明白である。即ち、C型と比較すると一言でははるかに優麗さを加えた一面、形式化のきざしも現われたといえよう。全体にややうすづくりで、かま、座のつくりも繊細な感じだが、特に注目すべきは伏蓮弁の突端の鋭いはねかえりである。台座のつくりとしてはせい一杯の技巧を示しているが、それだけに却って形式化し、C型台座ほどの力強さは見られず、仰蓮弁の蓮葉に文様を刻んでいるのも新羅金銅仏台座の装飾性を物語っている点で興味深い。

次に、この種台座の特色としていま一つ特記すべきは仰蓮座と伏蓮座(伏蓮弁は複弁式)の間に中台が造られ、しかも、この中台は図版IXBの金銅仏台座に見るように屢々こうざま透彫のある六角乃至八角形となっていることである。その点、後者の金銅仏(図版IXB)は前像(図版IXA)より時代も下り、九世紀代もかなり進むか、一そう新羅化が目立つことは容貌でも明らかである。なお、図版IXAの金銅仏では背面(挿図22)に光背の残欠の見られるのは(周辺部の透彫部分が欠失)この時代金銅如来像の光背形式を示している点で貴重である。

さて、このように九世紀代に下るこの種金銅仏台座をいまD型と名付

けると、このD型台座は九世紀代の何時頃を頂点とし、続いてどのように変化するか、その点を考究するための参考資料としてここに石像と鉄像、各一体の台座をあげよう。

まず、前者は慶尚北道公山面の桐華寺藏石造毘盧舍那仏坐像の台座（挿図24）で、大きく仰伏両蓮座と中台の三部から成るが、その特色は華麗の一言に尽きよう。特に中台に刻まれた宝相華や仰蓮弁の細かな文様などの複雑な装飾はやや技巧にはしり、生気に欠ける感があるが、そのような形式はまさに銅仏では前述図版IX Aの金銅仏台座の仰蓮弁に細かな線刻文様が飾られるのと同趣好である。そして、伏蓮弁の突端の強いはねかえりもまた図版IX AやIX Bの金銅仏台座に見るものと同じで、この石像台座も当然、D型金銅像台座と同系と見てよからう。（石像故に透彫のあるかま^ち座は造られない）。ただ、この石像台座の中台に見る豪華な装飾は一面、D型よりも進んで、次に述べるE型に近いとも言えるが、しかもE型の第一の特色である伏蓮弁突端の花卉の飾り出しの見られないのはやはりそれより古いD型の範疇に加えるべきであろう。

桐華寺盧舍那石像の製作年代に就てはこれまで恵恭王七年（七七二）に伽藍を再興した時とされて来たが、最近、それに對する異説^{註12}が出され、九世紀半ば頃まで時代を下げて

挿図24 石造盧舍那仏坐像台座 桐華寺藏

考えられている。即ち、このような装飾的で、且つ技巧の進んだ台座は金銅像の場合でも本稿で規定するD型台座として八世紀代よりもむしろ九世紀前半を流行の頂点と見るべきか。そして、このような新羅台座の装飾化は更に一そう進展し、ついに、蓮座伏弁の突端に花卉の飾りを添えるようになるが、その作例として、正確に年代のわかる重要な資料は

挿図26 鉄造盧舍那仏坐像 到彼岸寺藏

挿図25 金銅仏坐像 韓國国立博物館藏

七

ところで、このような伏蓮弁に花卉の飾りをつけた台座は金銅仏にも見られるが、その花卉はいずれも蓮弁とそれぞれ一鑄である点、要するにこれらの花卉は蓮弁の突端のはねかえりを一そう明瞭に示そうという一種のデフォルメによると見るべきである。

いま、この種台座を一応、E型と名付けると、このE型はD型とはそれほど大きな違いはなく、両者を強いて区分せずにすべてD型と呼んでもよいが、しかし乍ら、まず第一にこの花卉の飾り出しを始め、図版IX

挿図27 金銅菩薩立像 楡岾寺藏

挿図28 金銅菩薩立像 韓國国立博物館藏

挿図29 金銅仏立像 韓國国立博物館藏

江原道東松面、到彼岸寺の鉄造毘盧舎那仏の台座(挿図26)で、在銘によると八六五年の製作である。この鉄仏に就ては別稿で論考したように像自体の様式は中唐末期の様式を示し、新羅の九世紀代仏像でも必ずしも唐との関連を全く否定することの出来ない点を立証しているが、しかも台座形式では新羅独自のものとなり、特に伏蓮弁突端に花卉の飾りの見られるのは中国とは全く異なる新羅の繊細華麗な趣好を物語っているといえよう。

挿図30 金銅仏立像 高麗初期

CやIXDの金銅仏台座に見る仰蓮弁につけられた飾りは勿論のこと、更にD型よりも中台が大きく発達し、図版IXCの金銅仏台座の六角中台の六面に造られた宝珠形のくりぬきなど、これらD型台座に見られない新形式は明らかにD型台座より時代の下ることを示している。(像身背面の穴はD型のような二個ではなく、型持の穴以上に大きな長穴となっている。)その点、この種台座を一応、E型として一括する所以だが、像全体に新羅化の進められたのはいうまでもなく、殊に容貌はより新羅的である。そして、如来像はD型造像よりも一そう両肩の張った直方体のずんぐりとした体躯となり、菩薩立像は胴長の姿態を見せるが、そのような造形は唐代九世紀代の造像に対応する。しかも、新羅仏の特色として、類型化の甚しいために製作時代を決め難いが、図版IXCやDの金銅仏は或いは九世紀も半ば頃に下ると推定される。ただこのE型台座の金銅像もその初期はD型台座の金銅像と平行して行なわれた可能性も否定出来ず、例えば挿図25の韓国国博蔵の金銅仏は新羅金銅仏としては珍らしい台座の完備した坐像だが、その台座はE型の範疇に加えられ、力強いつくりはこの種台座の優作といえよう。そしてゆったりとした体躯とまるく大きな顔、ふっくらと盛り上った両膝など、中唐初期の様式をかなり忠実に受容している点、八〇一年の防禦山磨崖三尊像とも近く、この金銅仏坐像は九世紀初頭の製作であろう。

次に菩薩像では楡岾寺蔵の一体(挿図27)が豊満な姿態と動きのある天衣のつくりを特色とするが、なおそれほど形式化は見られず、製作時代も九世紀初頭と見てよからう。しかし、台座はこの種E型としてはせい一杯華麗で、八角形の中台まで透彫りという新羅仏の装飾性の頂点を

示す。これに対し、同じ菩薩像でも韓国国博蔵の一体(挿図28)の台座はやはり花卉の飾りの見られる点(前面一個欠損)、当然E型に加えられるが、全体のつくりはやや簡素である。そして、両顎の張った容貌は卑俗で、背面の大きな長穴も時代の下る立証となるが(製作時代はやはり九世紀代に入るのであろう)、しかも一面、胴体の伸びた体躯や左右相称の天衣のつくりなど唐様を残存するのは注目すべきである。

しかし乍ら、このような唐様との関連もせいぜい九世紀前半までで、それ以降は次第に新羅仏の欠点である惰俗化の傾向が現われてくるわけである。そして、新羅統一時代後半期の金銅仏では如来像、菩薩像ともにこれら二像のような大作が多いが、別鑄の台座は殆んど欠失している点、台座形式による年代考はやや困難である。ただ、九世紀代の台座形式がその後、どのように展開したか。その点に就て予想されるのは簡略化の一語に尽きよう。即ち、E型台座に見る豪華なつくりが九世紀代に頂点に達すると、やがて逆に簡略化し扁平、薄づくりとなったと思われるのである。いま、そのような方向を示す資料としては挿図29の金銅如来像の台座もその一例で、この台座を図版IXCやIXDの金銅仏台座と比較すると、豪華繁雑なつくりのE型台座が、或時点で、逆に簡略化に向い、伏蓮弁の突端の花卉のみが形式化し残存したことを示している。仏像も扁平で、衣文も線刻化したが、更にそのような簡略化が進展すればついに挿図30の金銅仏に至ると見てよい。即ち、この像ではE型台座の特色というべき伏蓮弁突端の花卉の飾りも全く消失し、扁平薄づくりとなっている。通例、この種金銅仏の製作時代は新羅統一期よりも下げてむしろ高麗初期に置くが、それに対し、挿図29の金銅仏がなお新羅統一

期にあることは確かである。ただ、ここで遺憾なことは、この像の年代、換言するとこの種E型台座の豪華なつくりから逆に簡略化に向けた転換期が何時頃かを決め難い点で、随って新羅統一時代末期の台座についてはおお正確な知識を得ることは不可能だといえよう。E型とはまた別の型式の規定も必要かも知れないのである。

以上、A型よりE型まで新羅金銅仏の台座形式を大まかに五つに区分したが、それらは必ずしも年代順に順序よく行なわれたわけではない。製作年代でいうと、まずB型が七世紀代一ぱいで終らず、八世紀代に入る可能性も否定されないが、つづくC型は逆に七世紀後半のかなり早い製作も或いは予想されよう。そして、八世紀代におけるC型とD型の並

挿図32 金銅仏立像
(図版VIC) 側面

挿図31 金銅仏立像
(図版VIA) 側面

行期も考慮すべきだが、更にE型もまた前述のようにその盛行期は九世紀代としてもそもそもの始まりが八世紀代に遡らないとも断定出来ないのである。

いずれにしろ、このような台座形式の時代の錯綜は要するに台座形式のみでは新羅金銅仏の年代を規定出来ず、仏像自体の様式年代の重要性を示しているが、しかも、これまで述べたように一応の年代基準になることもまた明白である。そして、どのような小金銅仏にせよ、この台座形式の変遷の大きな流れの中にあることも明らかで、それ故にこそ、その一挙一動が新羅彫刻史の資料として重要な意義を持っているといえよう。

最後に、前述A、B、D型中の代表作四体をあげ、その台座形式の変

挿図34 金銅仏立像
(図版IX B) 側面

挿図33 金銅仏立像
(図版VID) 側面

遷と仏像様式との関連を考究するためにそれぞれの側面を比較してみよう。挿図31、32、33、34はそれぞれ図版VI A、VI C、VI D、IX Bの金銅仏の左側面であるが、まず、頭部が全身に比して次第に小さくなることが理解出来よう。逆に台座の高さが時代の下るにつれ丈高くなるのは前述のとおりで、要するに像身と台座はそうようにして均衡を保ったわけである。

一方、仏像の側面観もそれぞれの時代を示し、古新羅代の直立像（挿図31）からB型初期（挿図32）ではやや厚みを増すが、その末期の根津美術館蔵（挿図33）ではむしろ扁平である。そして、挿図34のD型金銅仏に至ると腹部が大きく前に出た「く」の字型を呈するのは注目すべきだが、豪華な台座のつくりもまたこの豪快な体軀のつくりと呼応するといえよう。新羅金銅仏における台座形式の重要さを示す所以である。

註

- (1) 拙稿「新羅石仏の系譜」〔美術研究〕二五〇号
- (2) 新羅統一期に下る銅仏の大作としては慶州仏国寺の阿弥陀仏、盧舎那仏の二像（共に全高約一・八メートル）及び栢栗寺旧蔵の伝葉師如来像（全高約二・八メートル）が著名である。
- (3) 関野貞氏著「朝鮮の建築と芸術」五〇九頁
- (4) 前掲拙稿「新羅石仏の系譜」〔美術研究〕二五〇号）図版(4)参照
- (5) 金載元氏「宿水寺址出土の仏像について」〔美術研究〕二〇〇号）参照
- (6) 同右「金載元氏論文」図版4 B所載第六号像
- (7) 同右「金載元氏論文」図版4 E所載第十三号像
- (8) 例えば拙著「増訂中国仏教彫刻史研究」図版210(a)(c)の隋石仏台座がその例である。
- (9) 同右拙著図版241(a)
- (10) 「美術研究」一五六号図版6

- (11) 黄寿永氏「百濟仏教彫刻」〔百濟研究〕創刊号所収
- (12) 黄寿永氏「新羅敏哀大王石塔記」〔史学志〕第三輯）
なお、本稿掲載金銅仏の法量左記のとおり。

挿図3	仏立像（韓国国博蔵）	全高十四センチ
4	観音菩薩立像（韓国国博蔵）	全高二十・七センチ
5	薬師仏立像	全高十七センチ
6	仏立像	全高九・二センチ
7	仏立像	全高五センチ
11	観音菩薩立像	全高十三センチ
13	仏立像	全高十五・七センチ
17	三尊仏立像	全高十四センチ
18	仏立像	全高二十四・七センチ
19	菩薩立像	全高十二・三センチ
25	仏坐像	全高二十一センチ
27	菩薩立像（楡枯寺蔵）	全高二十五・四センチ
28	菩薩立像（韓国国博蔵）	全高二十三・二センチ
29	仏立像（韓国国博蔵）	全高十八・八センチ
30	仏立像	全高十七・五センチ

（昭和四十六年度文部省科学研究費による成果の一部）